

福地源一郎(桜痴)稿本「大英字典」

教育学部助教授

竹中龍範

わが英語文化史上、英語学習の三種の神器、すなわち、辞書、文法書、読本のうち、早急の整備が必要とされたものは辞書である。後二者については舶来のものをそのまま使うこともできたが、辞書については初級者の場合、対訳辞典によらざるを得ないことが多く、蘭学から英学への転換期に差しかかった文久2(1862)年、刊本辞書としては最初の『英和对訳袖珍辞書』が出版された。続いて、その改訂増補版(1866、1867)、さらにその海賊版たる『和訳英辞書』(1869)、その改訂増補版『和訳英辞林』

(1871)、J. Ogilvieの辞書を基にした『附音挿図英和字彙』(1873)と、幕末・明治初期にかけて、その後明治中期まで英和辞書の主流となる辞書が公刊され、和英辞書についてもヘボンの『和英語林集成』(1867;第2版1872)が同時期に刊行されている。

このような時代にあって公刊には至らなかったものの、もし出版されていたならば、英学史上重要な辞書の一つに数えられたであろうものがここに紹介する稿本『大英字典』である。豊田實『日本英学史の研究』(岩波書店、昭和14)に「是は私の手もとはなく、東京の某氏の所有に帰してゐるものであるが」との断り書きつきで取り上げられている神原文庫中の貴重書で、英学史研究の分野においてこれを取り上げたものは他に知らない。豊田によれば、「私の見た此の原稿はもと乱雑な形で発見されたのを、一緒に発見されたAの部の表紙をつけて綴じられたもので」とあるという。発見の経緯は詳らかにされていないが、後に述べるように、原稿として完結したものではない。丁付けはないが、総枚数は本文454枚で、Aの部からRの部が綴じ込まれている。ただ、途中Fの部からLの部を欠いており、さらに、完全に原稿として整っていると思われるのはOの部とQの部だけである。

一応完結しているOおよびQの部および見出しが揃っているMの部の収録語数の概算を基に、他の辞書の総語数とを比較し、本稿本が完結していた場合の収録語数を割り出してみると、凡そ6~8万という数字が推測できる。この数字は『英和对訳袖珍辞書』の3万3千語弱という語数と比較しても格段に多い。まさに『大英字典』の名に恥じない規模のものであった。それがなぜ未完のまま中断されるにいたったのか、その間の事情を探りたく思うのは独り紹介子のみではあるまい。

しかし、中断の理由もさることながら、本稿本に関しては編集の企画についてすらこれに触れたものが見当たらない。したがって、この稿本自体から得られる情報によってその経緯を推測するしかない。

まず、表紙を見てみると、口絵写真に見られるように、以下の内容が記されている。

已十一月十二日持参 福地源一郎稿本

大英字典 A部三十枚

三河屋楼上にて

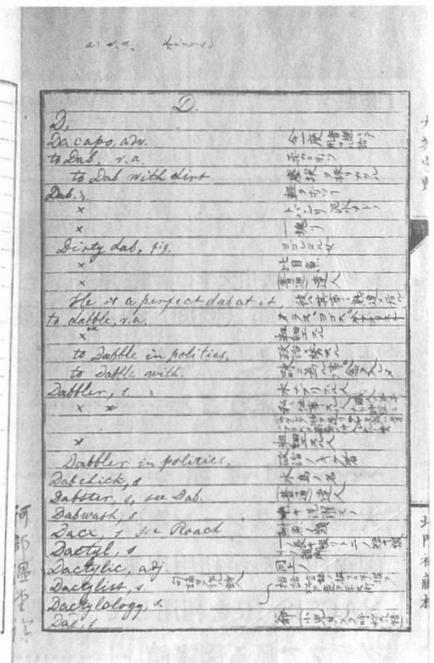
第一丁より 柳河司馬両君江為見合

第六丁まで 貸渡し置

内第五迄柳河より帰る (この1行朱書)



(図版 1)



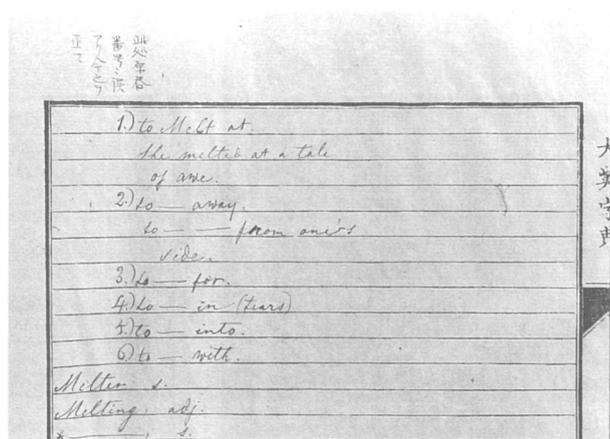
(図版 2)

て豊田は「年代の巳年は明治二年の巳と思はれる」としているが、諸々の状況から考えて、これは妥当な推測であると思われるものの、福地が帰朝後間もなく編纂を企図したとすれば、この日付までは4年弱である。この時間が辞書編纂という事業にとって長いか短いかは福地のこの事業への関わり方によって判断の分かれるところであろう。公務に携わり、学塾を営み、さらにかなり足しげく吉原に通った福地がはたして編纂主任格たりえたであろうか。

一方、内容に関しても、豊田は「福地氏は夙に英米の辞書を巴里から買つて帰つた事実がある」として、岩崎克己に拠って「ウオクル英語辞書二部、ウェブストル二部」その他を挙げ、『大英字典』の典拠たることの可能性を示唆しているが、これも検討を要するところである。

まず、この辞書の内容を見ると、見出し語の語頭は大文字で始められ、動詞の場合はその前にtoが付されている。その後品詞の表示があるが、現行のものとは異なるものとしては、名詞がs.、他動詞がva.、自動詞がvn.というようになっており、これは『英和对訳袖珍辞書』におけるのと同じ。この点、ウェブスターの辞書では現行のものと同じく、それぞれn.、vt.、vi.となっており、その影響は認められない。また、訳語が用紙を横にして縦書きというのは当時の慣習であるが、この訳語に『英和对訳袖珍辞書』の影響は見られない。

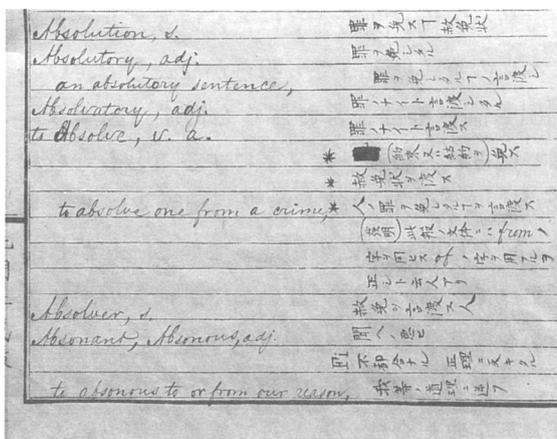
このほか、原書を探る上での手掛かりとなりそうなものとして、語頭3文字を該当箇所の行の中央に中見出しとして示している点が挙げられる。この方法は例えばW. Sewel *A Large Dictionary English and Dutch, in two Parts.* (1708) などに見られるが、決して先例は多くない。『大英字典』において、語によっては、熟語、例文、諺等が追い込み見出し的に与えられているところも、このSewelの辞書の見出しの立て方と類似している。しかし、収録語について両辞書を比較すると『大英字典』の方が格段に豊富で、熟語等も異なっていることから、Sewelの影響を読み取ることは難しい。ただ、長崎時代に蘭学を学び、大通詞名村家の養子となっていることから、福地が英蘭辞書に親しんでいたことは充分推測しうるところであり、あるいは、幕府開成所所蔵のHoltropないしBomhoffなどの英蘭辞書を利用したことも考えられる。



(図版 6)

さらに、重要な手掛かりとして、Mの部において、'to Melt'の熟語をめぐり、欄外上部に「此処原書番号ニ誤アリ今之ヲ正ス」との書き込みがあることを指摘しておきたい(図版6)。恐らく、元の辞書ではアルファベット順が乱れていたであろうが、同時に、先に稚拙な手になるとしたOの部では'to order'の熟語の配列が乱れているのに、ここでは訂正がなされていないというような場合も見られる。

このほか、例えば'to Absolve'の下に与えられた熟語'to absolve one from a crime'に見られる、語法注記の性格をもつ「(發明)」という表示も、ところどころに付された'Fi'あるいは'F'という記号とともに、気になるところである(図版7)。



(図版 7)

福地桜痴に関する資料が本稿本に直接つながる情報を与えてくれないばかりか、これだけの手掛かりがありながら、当時舶載の辞書が容易に調査できるものでないこともあって、元になった辞書の同定には時間がかかりそうである。版本になっていないことから後続辞書への影響はなかったにしても、その規模において英学史上重要なものであり、本格的な調査がまたれるところである。